



TITLE:

新刊紹介

AUTHOR(S):

---

CITATION:

新刊紹介. 天界 1921, 1(10): 189-195

ISSUE DATE:

1921-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159609>

RIGHT:

一部の人々のみが此の事實を私して置くべきではない、必ず之れは京都とか東京とか最寄の天文臺に早く知らせ、延いては外國にも傳へて一般の共同觀測を促さねばならぬ。發見の報知には其の彗星と位置と光度と、其位置に相當する時刻と、發見地の地名と發見者の名、それに尙、運動の模様や、星の形、大きさ等を書き添えねばならぬ。電報にも成るべく簡明に此等の事柄を含めた方が親切である。

天文學界に就いて發見の種類はさまざまあるが彗星の發見は昔も今も、一般に人の注意を惹くものである。それに今は發見をして其の發見者の名が星と共に長く唱へられるのは殆んど此の彗星發見の場合のみと言つて好い。すいぶん素人天文家の名譽心をそゝり又實際やり甲斐のある仕事である。今や我國に隠れたる天文熱心家が少なからうと思ふ、望遠鏡も三吋や四吋のものを持つてゐる人が案外多い、之れは自分の僅かな知人朋友の割からも言へるやうに思ふ。どうか恁様な器械を持ちながら、單に慰みとして弄ぶのではなく、相當に學術上の價值ある仕事に用ゐて貰ひたい。(終)

## 星 六 首

高 橋 な る

地の上に通ふ熟睡の息低き夜半をば占むる久方の星  
 明近き霜夜の星を川面にうつして水音がすかなりけり  
 水底のみ殿ゆ洩るゝみ灯の影にも似たり沼の面の星  
 江り行く舟の水棹に一つづゝ眞珠くどくる星月夜かな  
 水の面に數を讀みつゝ下り行く星降る宵の舟路うれしも  
 あづかるを許さじ顔の目くばせに星降る夜半は我夜悲しき

### 新刊紹介

山本一清氏著 星座の親しみ

吾人若し晴夜野外に佇んで天上を仰ぎ見る時、其處に鑲められた大小無數の燦然たる星辰は抑も如何なる物ぞと、其の本性を究めたと思ふは是に人情の自然である。今此處に紹介しようとする一書は此の人類自然の發露たる欲望を満足せしめようとして、多年間天體測定の時間と努力とを費された著者が趣味の豊富な筆致を以つて、職務の餘暇を天空を憧憬し、星辰を讚美しようとする人の天空の美觀に親炙せられた物語である。まづ古く西洋人の天空の美觀に親炙せられた事、星座を創設せる事、そして其の星座を點檢する事の非常な興味ある事、又吾人が常に悠々たる蒼空を望見すれば一種の宗教心を喚起し且つ藝術の素養にも貢獻ある事を説き、次に夕暮れ吾人の眼前に展開される各星座を四季に別けて面白く平易に解説してある。星の天の川の高く天に沖する夏の涼しき夕間暮れ七時の夕べの情景、オリオンを中心にして其の明星の凍れる光り渡る秋の宵星等の壯麗、是等の美觀を十分味はうとする人は躊躇なく此の本を購讀し置て天上から吾等に恵むる快樂を享有すべきである。(天文同好會發行定價金參拾錢郵稅金貳錢)

# 星座唱歌

横濱 大庭 濱子作

(一) 赤經〇時より六時まで

北極星にカシオペア

馭者、ペルセウス、アンドロメ

三角、牡羊、牛オリオン

魚座、鯨座、エリダヌス

兎座、鳩座、爐座 時計

彫刻室に彫刻具

美事になりし鳳凰座

(二) 赤經六時より十二時まで

麒麟、大熊、山猫座

小獅子、大獅子、蟹、双子

小犬、一角、大犬座

六分、コップ、海蛇座

排氣、羅針座、艦に帆座

(三) 赤經十二時より十八時まで

小熊、龍

(四)

赤經十八時より二十四時まで

セフェウス座

白鳥、琴座、小狐座

蜴蜥、ベガソス、鷲座には

矢、海豚、駒、楯、蛇めぐる

射手、山羊、瓶に顯微鏡

南冠、南魚

鶴、印度人、望遠鏡

## 黃道唱歌

大庭 濱子作

牡羊、牡牛、双子、蟹

獅子座、乙女座、天秤座

蝎、射手、山羊、瓶に魚

## 新刊紹介

理學博士 故一戸直藏氏著

通俗講義天文學 上巻

曩に吾人は本書の下巻を紹介したが、今又此處に久しく品切となつて居た上巻が第三版となつて發賣せられたのを機とし、本誌讀者に紹介しようと思ふ。先づ第一編總論の第一章には天文學の定義と分類、第二章には各種の座標と其の轉換法、第三章には天文用器械の第四章には觀測の修正、次に第二編太陽系の第五章地球、第六章時、第七章月の運動、第八章或星の運動、第九章食、第十章萬有引力第十一章太陽系細論、第十二章太陽と云ふ風に配列し、全編を通じて稀薄に記述せられ、入門者に取り絶好の指鍼となるであらう。通俗書の弊として概ね數式を省いてあるが此の書には「可なり其れを含み球面三角法の式も三個所に使用してある。唯審かしいのは太陽の直徑、質量、又地球と月の質量等が洩れて居る事で、其の他光行差、章動、歳差等の最も普通な術語を僅々數行に説明し去つてあるのは物足らなく感ずる。其れから挿入の圖版は九十五を數へ、其等が物々しく別圖として一枚の紙を占有する事なく、何れもつましく本文中に刷り込まれて居るのは嬉しく感ずる。譬ひ其の身は死すとも、斯く其の著述が後までも残つて後進者に裨益を與へる著者の亡靈に對し深く感謝の意を表する次第である。(東京市京橋區桶町大鐘閣發行、定價參圓五拾錢)